

訪 問 国：オランダ

研修テーマ：学校と地域等の連携 ～新しい視点に立った学校と地域の連携のあり方～

所属名 千葉市立貝塚中学校

氏 名 白 木 建 二

1 はじめに

これからの学校は、保護者や地域住民の思いや願いを十分に反映する、信頼される学校でなければならない。「教育を提供する側からの発想ではなく、教育を受ける側である保護者や子供の求める質の高い教育の場となる必要がある。」（中央教育審議会 2005）と提言されているように、山積する教育的課題の解決のために保護者・地域住民・各関係諸機関の学校運営への参画は必要不可欠なものになっている。今回のオランダでの視察体験を参考に、新しい視点での学校と地域等の連携が実現するための手立てを探りたいと考えた。

2 オランダの教育制度について

（1）オランダにおける教育の自由

オランダの教育制度の改革には長い歴史がある。20 世紀初めに 70 年にも及ぶ教育論争の末、現在の教育の自由を規定した憲法が制定され、「学校創設の自由」「教育理念の自由」「教育方法の自由」が保障された教育制度が確立された。

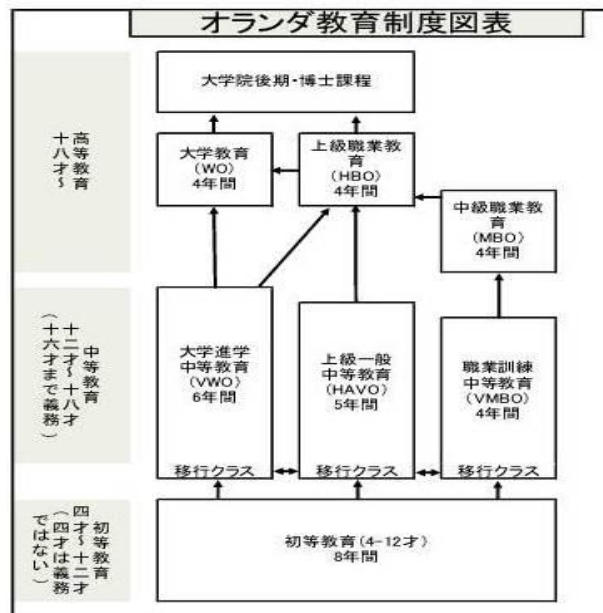
子供達に、進路を早い段階から意識させ、それに合った学校を選ばせるが、システムの途中からでも進路の変更が可能である。この「やり直しのできるシステム」が、自分の進路を自分で考えさせ、子供たちの自主・自律を促していく一助となっている。

（2）教育の自由と質の保証

市民や保護者がそれぞれの宗教、思想、教育理念に基づいて学校を創設することが認められている。教育方法の自由として、オルタナティブ教育（先進的な教育、従来型公教育に縛られない試みをする教育）があり、主なものにはイエナプラン教育、シュタイナー教育、ダルトン教育、モンテッソーリ教育などがある。一方、教育の自由は尊重しつつも質を保証するための仕組みも整えられている。例えば、子供の就学義務年齢や年間の授業時間数、修了試験や全国共通試験の実施、監査や学校情報の開示義務など国による制御機能が働いている。

また、もう一つの特色として、インスペクタ

一制度（教育監督制度）があり、学校の教育活動を客観的に把握し、受益者（児童・生徒）の権利が守られているかを確認する評価制度である。



3 学校訪問をして

（1）モンテッソーリ・アンネ・フランク校

① 学校の概要

イタリアの女性医学博士である、マリア・モンテッソーリの教育理念に基づいた教育を行う学校である。アムステルダム市内にモンテッソーリスクールは 18 校ある。本校は 1934 年に開校し、80 年の歴史をもつ。アンネ・フランクが通った学校として知られており、校名にも使われている。校舎の壁にはアンネの日記がデザインされ、アンネ・フランクの写真や当時使用された机が展示されている。

当校は 4 歳から 12 歳までの子供が在籍し、児童数 326 人、教職員数 20 人である。教育理念は、「遊びながら学ぶ」「子供自身が学ぶことを選ぶ」「創造性豊かに育つ」「協力しながらいっしょに学ぶ」である。

② 特徴的な取組

保護者によるボランティア活動として、新着図書へのバーコードを貼る作業や読書支援、課外活

動時の安全確保の補助などが行われている。この保護者によるボランティアは、校長が発行する学校のニュースレターによって募集されている。

入学時には、保護者と校長との面談が行われ、子供の教育について目指すべき方向が互いに確認がされる。子供の教育において、学校と保護者の両者が責任を分かち合うことを入学当初に理解しあうことが大切であるとしている。

さらに、子供自身が「何を学びたいのか」を考え、学習する内容について選択する。そこには責任が伴い、はじめから最後の片づけまで一人でやりとげることが求められる。教室の中では、個々の学習内容に応じて、個別やグループでの学習など形態を選択し、興味のある学習や必要だと思う学習が行われている。そして、教室には遊びの体験から学べるよう、積み木やビーズ、パズルなどの様々な教材教具が整理された棚に配置されている。教師が一斉に子供たちに教えるという形ではなく、子供と教師と一緒に学ぶということを重視している。

（２）Onze Wereld 初等教育学校

① 学校の概要

ハーグ市のトランスファール地区にあるカトリック系の私立初等教育学校（４～１２歳）である。子供は、他の地区からもこの学校を選んで通学している。全児童数 805 人、学級数 33 学級（特別支援学級を含む）、国際色豊かであり、保護者の国籍はオランダ 108 人、トルコ 444 人、モロッコ 104 人、ブルガリア 34 人、その他 30 ヶ国以上にわたる。「尊重・安全・参加・思いやり」を大切にしている。学校と保護者は共に「子供に最善を提供すること」を目指しており、学校はそれを実現する場として、教育実践が行われている。

② 地域・保護者との連携について

保護者や地域への学校からの情報発信としては、学校新聞や HP を活用し、学校行事や子供達の様子を常に発信している。

低学年は、基本的に保護者が送り迎えをしているので、学校への迎えの際に教員と情報交換ができる。また、保護者は担任だけでなく、校長をはじめ様々な立場の教職員と自由に会話ができるので、問題の早期発見・早期解決の一助となっている。保護者会は特にないが、担任とは年に 3 回程

度、個人面談が実施されている。学校の入り口には無料のコーヒーコーナーが用意され、送り迎えの際に保護者が立ち寄り、情報交換の場となっている。校外活動時のボランティアや図書の読み聞かせ、イベントの協力などを保護者に依頼することもある。

放課後は自由参加の活動が行われている。10 週間を 1 つの単位として、1 週間に 1～4 日、子供が自分で選んだ活動（演劇・ダンス・美術など）を学ぶ。活動の最終回では、保護者を招待して発表会や作品展示をしている。



【放課後活動 ミュージカル】

4 研修成果の活用

移民の増加を背景に、多様な思想、宗教があるオランダでは、互いの違いを受け入れ尊重し合い、社会貢献できる市民になることが求められている。

また、市民や地域が教育に積極的に関わることで、将来を担う人材や労働者の育成につながるものである。個性を認められ、自律して行動し、尊重されながら個として社会参加できる市民の育成（シチズンシップ教育）の理念が大事にされていることは、日本の教育の未来を考える上でも、新たな視点になりうるものである。

教育を通してどのような子供（未来の市民）を育成するかは、各自治体、地域によって方法が違っただけに、学校を取り巻く各組織・機関との連携ネットワークの構築はとても重要である。オランダでは、各機関の役割が明確であるので、学校は、必要とする機関と主体的に連携体制を構築し、学校運営に役立てている。

今後、本市においても学校・保護者・地域・行政の四者が効果的に連携できるよう魅力的なカリキュラムを編成し、外部の企業や社会貢献団体などを最大限に活用できるように今まで以上に働きかけていく努力が必要である。

訪 問 国：イギリス

研修テーマ：学校と地域等の連携

所属名 千葉市立登戸小学校

氏 名 山 口 美 紀

1 はじめに

近年、高度情報化などの社会の進展に伴い、子供を取り巻く環境が大きく変化してきた。現代社会を背景に、家庭の教育力の問題、子供の学ぶ意欲の低下など今日的な教育課題も多い。

子供たちの「生きる力」を育むためにも、学校や家庭、地域住民等が、教育においてそれぞれの役割と責任を自覚し、互いに協働して教育活動を展開することが求められている。そこで、教育改革を進行してきたイギリスにおける学校と地域等の連携について先進的な取組を調査した。

2 イギリスの教育状況（教育制度など）

イギリスのイングランドの学校制度は、初等学校6年（5～11歳）、中等学校7年（11～18歳）を基本としている。義務教育は、5～16歳で、中等学校の途中から義務教育ではなくなるが、2015年度からは18歳までの生徒も義務教育の対象となる。日本のように、学校の課程修了者に修了証を出すという制度はなく、義務教育修了試験（GCSE）や、中等教育最終試験（GCE）の外部試験に合格して資格を得る。これらの試験の成績はA、B、C等にランク付けられ、生涯有効な資格として進学や就職に大きく影響する。

イギリスでは、地方自治体や宗教団体、民間

団体が運営する公立の学校がほとんどである。また、地方自治体の管理下になく、中央政府から直接運営費が提供される独立した学校の、アカデミースクールが増えてきている。アカデミースクールでは、学校理事会（親、地方自治体、教職員、地域からの代表者、校長などで構成）が、教師の給与や待遇、教育課程編成などで自由な裁量を与えられている。

1922年に教育の質と達成水準の向上を目的にオフステッド（教育基準局）が設置された。約4

年ごとに、すべての公立学校が共通の評価基準に基づいて査察され、細かい項目の評価についてウェブ上で公表される。そのため各学校では、教育の質的向上を目指し取り組んでいる。

3 学校訪問をして

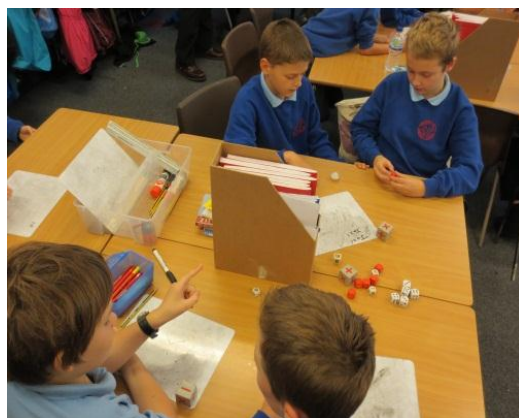
（1）Norbury Hall Primary School

① 概要

マンチェスターの南に位置するストックホルンにある公立の小学校。オフステッドの評価は比較的高く、子供の全人的な成長（知・徳・体）を支援しながら、教育の質的向上を目指している。

② 特徴的な取組

教育の質を維持するため、教師が指導する総時間の10パーセントを授業の研究や準備に充ててよいことになっており、教師が十分に授業に専念できるように時間が保障されている。また、保護者を交えてワークショップを行い、数学の教え方を伝えるなどして家庭の教育力向上にも努めている。ここでは、経済的にも安定した家庭の子供が多いため、親の期待が高く、プレッシャーを感じて精神的な問題を抱えてしま



【具体物を使い、ペアで数学の学習をする様子】

う子供も少なくない。そこで、週3回にわたってセラピストが配置され、成績が落ちて挫折感に悩む子供のカウンセリングを行っている。また、共働きが多く、家庭学習の時間や考え方も様々であることから、宿題をホームラーニング(家庭教育)とし、子供や親と一緒に家庭で行う学習を選べるようにした。内容は、調べ学習や創作活動など様々だが、専用のノートに具体的な計画表を貼り、家庭や子供に応じたホームラーニングの見通しがもてるようになっていた。さらに、学校が始まる前に両親が仕事に出てしまう家庭も多いので、希望制で始業の1時間半前と放課後に学校内で(有料)子供を預かることができる。

③ 考察

この学校では、共働きの家庭が多いため、親が無理なく子供の教育に関われるようなサポートを様々な形で行っていた。学校の指導の充実に重点を置くとともに、効果的な家庭学習についても保護者と連携を取り合い、学校と家庭の両方面から子供を伸ばしていこうとする取組が見られた。親が安心して子供を学校に預け、仕事を続けていけるということは、イギリスの地域社会にとって重要なことである。また、地域ボランティアが積極的に学校を支える一面もあり、イギリスの国民性を感じた。

(2) Hampton Hill Junior School

① 概要

ロンドンのリッチモンド地区にある公立の小学校。オフステッドの評価は、アウトスタンディングと最も高く、校長は27年間、この学校の校長としてリーダーシップを発揮している。

② 特徴的な取組

ア 子供が学びやすいカリキュラム

イ 充実したクラブ活動

ウ 個に応じたサポート体制

エ ナショナルサポートスクールの役割



【地域の卓球のプロに教わるクラブ活動】

③ 考察

「学校は子供が来たくてしょうがないという場所であるべき。」という校長先生の言葉が印象的だった。教員のほかに保護者や地域の人材など、多くのスタッフを取り入れて子供の主体的な活動をサポートしていた。特別支援が必要な子供や貧困家庭に育ち学力が落ちている子供に、どのような支援が必要か見極め、外部からのスタッフを学校の費用で雇えるしくみになっていた。オフステッドの評価を気にするあまり、問題を抱える個への対応が難しくなるのではという懸念もあったが、反対に個に対する手立てを真剣に考えていくことで、学校全体の教育水準が高まっていくと感じた。

4 研修成果の活用

今回の研修では、教員以外の地域スタッフがクラブ指導や学習のサポートティーチャーなど、学校教育をサポートしている場面を多く見ることができた。一方では、朝食の提供や学用品の支給、子供の安全を守る取組など、学校が家庭や地域を支える場面も見られた。イギリスでは、経済格差や言葉の問題など、子供を取り巻く社会問題が深刻であるが、学校や家庭、地域などが連携して教育に当たることで、多くの問題を乗り越えていたように思う。改めて、学校を始め社会全体で教育について考えていく必要性を感じた。今後、学校や地域が教育について果たす役割や責任を見直すとともに、本研修で得たことを校内の研修会をはじめ、市内の先生方の学習会等で伝えていきたいと考える。